

### 3) 黒毛和種子牛眼球内に見られた寄生虫について

和田利海<sup>1</sup>、○友川浩一郎<sup>1</sup>、伊賀崎 大<sup>1</sup>、小芦賀洋<sup>1</sup>、岡部浩一<sup>1</sup>、児嶋秀典<sup>2</sup>  
(長崎県北部農業共済組合<sup>1</sup> 佐世保・佐々家畜診療所、<sup>2</sup>大村・東彼地区家畜診療所)

#### 【背景】

牛の眼疾患において流涙、眼球の白濁、角結膜の充血を呈するものとして、衝突、角突などによる外傷、伝染性角結膜炎、眼虫症など知られている。今回、黒毛和種子牛において著しい流涙、眼球の白濁を呈する症例に遭遇し、眼球内で蠢く糸状虫様虫体を確認、撮影に成功した。また、本症例にイベルメクチン注射剤を投与したところ虫体は消失し症状も改善したのでその概要を報告する。

#### 【材料および方法】

黒毛和種子牛3ヶ月齢、雌、発育良好「片眼が白濁し涙が止まらない」との稟告を受け上診。初診時、右眼流涙、眼球の白濁により外傷を疑い抗生剤と消炎剤にて加療するも効果を認めなかった。その後、症状が進行したため、再度注意深く観察したところ眼球内部で蠢く糸状虫様虫体を確認した(動画撮影)。ただちにイベルメクチン注射剤を投与(200 µg/kg s.c.)したところ2週間後には白濁は軽減、虫体の動きも停止したため死亡したものとし経過観察。3ヶ月後の出荷時には虫体は消失し眼球の異常も認めなかった。

#### 【結果】

フィステル装着後ガスの貯留はなく、採食量は急速に回復した。畜主の希望により出荷までフィステルを装着することとし、経過を観察した。術後33日目にフィステルがなくなったと連絡を受け、創孔が塞がる前にホース等を固定することを検討したが、フィステル脱落の翌日に供試牛が急死した。第一胃の粘膜と皮膚は癒着し連続していたため、腹腔への第一胃内容物の漏れはなく、フィステル脱落後の孔も完全閉塞していなかったため、第一胃内のガスの貯留もなかった。解剖は行わなかった。

#### 【考察】

我が国における牛の眼に寄生する虫の主体は *Thelazia rhodesi* (ロデシア眼虫) で、イエバエ類が中間宿主となり伝染源となる。眼虫は結膜嚢、瞬膜下、涙腺嚢、涙管などに寄生することが知られており、症状は流涙、目ヤニ、羞明、結膜炎など軽症のものから、進行すれば眼球白濁、失明など重症となる場合もある。また *Setaria digitata* (指状糸状虫) は通常反芻獣では腹腔内に寄生するが、稀に前眼房や中枢神経系に迷入し溷睛虫症や脳脊髄セタリア症を引き起こすことが知られている。今回、著しい流涙、眼球の白濁を呈する症例で眼球内に蠢く線虫を確認、イベルメクチン注射剤投与により虫体は活動停止、症状改善、出荷時には虫体も消失し事なきを得た。眼の疾患においては本症例のように眼房内の寄生虫感染も視野に入れるべきであると感じた。馬では内科的処置では改善が見られず外科的処置により虫体の除去を行った報告もある。よって今後、治療の選択肢を増やすために眼科手術の会得が必要であり、摘出した際には虫体の同定も行いたい。